2025年7月20日（日）主日朝礼拝説教

『**過ぎ越しの小羊**』井上隆晶牧師
出エジプト記8章21～24、12章12～14節、ヘブライ9章18～22節

❶【かたくなな人は神がそのようにされている】

出エジプト記は、実に学ぶべきことが多くある書だと思います。モーセはエジプトに戻り、エジプトの王ファラオにイスラエルの民を解放し、エジプトから去らせるように言いますが、ファラオの心はかたくなにそれを拒否します。そこでモーセは神の杖を蛇に変える奇跡を見せ、その後１０の奇跡を行います。①ナイル川の水が血に変わる。②蛙の災い。③ぶよの災い。④あぶの災い。⑤疫病の災い。⑥はれ物の災い。⑦雹の災い。⑧いなごの災い。⑨暗闇の災い。⑩初子が死ぬ災いです。

しかし、神はモーセをエジプトに遣わす前から「**わたしはファラオの心をかたくなにするので…しるしや奇跡を繰り返したとしても、ファラオはあなたたちの言うことを聞かない。**」（出エジプト7：3）と言われました。これと似たような表現がこの後、何度も繰り返されます。神がファラオの心をかたくなにしておいて、その王に語れと言うのは、何と意地悪なと思いませんか？しかし、**神がファラオの心をわざとかたくなにしているということは意味があるのです。もしファラオが優しかったらイスラエルの民はエジプトを去ろうと決心できなかったでしょう。世界の穀倉地帯なのです。ここにいた方が生きてゆけます。わざわざ砂漠に出て命を危険にさらす意味はありません。また、ファラオが素直に神の言うことを聞いたら、１０の災いも葦の海の奇跡も見ることはなかったでしょう。こうして神の力を人々の前に現し、神は本当に生きて働いておられ、世界を支配している方であることを人々に教えるためでした。「こうして、主なるわたしがこの地のただ中にいることを知るようになる。」**（8：18）「**わたしの名を全地に語り告げさせるため**」（9：16）と書いてある通りです。

もう一つここから学ぶことは、神は悪や悪人をも自分の道具として用いられるということです。キリスト教は徹底して一元論です。二元論ではありません。悪魔も神の許可がなければ動けません。私たちは目の前に強情な人や、悪人がいる時、その人さえいなければ平和になるのにと思ってしまいますが、神があえて悪人を私たちの目の前に置いておかれるとしたらどうでしょう。それらの悪や悪人たちを通して私たちを神に帰らせ、神の業を見せるためなのです。

●柏木哲夫医師はホスピス医としてさまざまな人と関わってきました。早くに両親を失い、結婚生活で苦労し、仕事で同僚に裏切られてリストラされ、幸せからほど遠い人生を送り、67歳で亡くなった男性が亡くなる前に、「いろいろありましたが、幸せな人生でした」と言われたそうです。この患者さんを見て、柏木先生は「**どのような状況に置かれても、その状況を幸せと思える人**」や、「**人生で起こ**

る様々な出来事がたとえ不都合なことがあっても、きっと何らかの積極的な意味があるという信念のようなものを持っている人」が「人生の実力者」であると言っています。

この世の人は、人生の目的とは豊かになり、何かをなしとげ、幸せになることだと思っていますが、大変な思い違いをしています。人生の目的とは、さまざまな出来事を通して「神を知ること」にあるのです。この世で幸せか不幸かはあまり関係ありません。来世では一つだけ聞かれます。「あなたは神を知っているか？」です。いくらこの世で多くのことをなしても天国の扉の前で「あなたを知らない」と言われたらすべてが無駄になるのです。

❷【悪魔はなかなか私たちを離さない】

エジプトの王ファラオは災いが下るたびに回心するのですが、災いが過ぎ去るとまた元に戻ってしまいます。「**一息つく暇ができたのを見ると、心を頑迷にして、また二人の言うことを聞き入れなくなった。**」（8：11）そしてモーセに何度も妥協案を提出してきます。「**この国の中で犠牲をささげるがよい。**」（8：21）「**ただし、あまり遠くに行ってはならない。**」（8：24）「**行くなら、男たちだけで行って、主に仕えるがよい。**」（10：11）「**羊と牛は残しておけ。妻子は連れて行ってもよい。**」（10：24）このファラオの姿は私たちの姿に良く似ていませんか。この世と妥協し、なかなか神に従おうとしないということです。つかず離れず信者、燃えもしないが消えもしない信者、くすぶり信仰とも言います。日曜日には礼拝に出て、献金はし、頼まれるから奉仕をしますが、喜びがない信仰です。悪の力、罪の誘惑はなかなか私たちから離れてくれません。悪魔は絶えず誘惑をしかけ、何とか悪と手を結ばせ、自分の側に引き込もうとします。

●詩編の中に私の好きな言葉があります。
「**わたしが若いときから、彼らはわたしを苦しめ続けたが、わたしが若いときから、彼らはわたしを苦しめ続けたが、彼らはわたしを圧倒できなかった。耕す者はわたしの背（背き）を耕し、畝を長く作った。主は正しい。主に逆らう者の束縛を断ち切ってくださる。**」（詩編 129：1～4）この彼らは罪悪の力だと思います。私が若い時から、罪と悪は私を苦しめ続けてきました。悪は私の背きを耕そうとしました。しかし結局、私を圧倒することはできないのです。なぜなら主が、その悪を断ち切ってくださるからです。主は罪と戦う人を必ず助けてくださいます。

だからあきらめてはいけません。アウグスティヌスは「これで十分だと言うとき、あなたにはもう生命はない」と言っています。これでもう十分に燃えたと火が言って燃えることをやめた時、それは消えてゆく始まりなのです。使徒たちも「**信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。**」（Ｉテモテ 6：12）「**神に服従し、悪魔に反抗しなさい。**」（ヤコブ 3：7）と言っています。水は流れ続けていれば腐りません。悪と罪と戦い続けていれば、克服できなくてもその人は清

いのです。

❸【小羊の血が塗られる人は死が通過する】

そこで主は最後の災いとして、初めて母親の胎を出た男の子をことごとく打つという災いを与えました。これはエジプト王が最初にヘブライ人にしたことです。しかしイスラエルの民には、それぞれ家族ごとに傷のない一歳の小羊を用意し、それを屠って肉を食べ、その血を入口の二本の柱と鴨居に塗りなさい、と命じられました。主がエジプトのすべての初子を打つとき、小羊の血が塗ってある家は過ぎ越されたからです。これによってファラオはついに降参し、イスラエルの民をエジプトから去らせました。過越祭の起源はここにあります。

「**あなたたちのいる家に塗った血は、あなたたちのしるしとなる。血を見たならば、わたしはあなたたちを過ぎ越す。…滅ぼす者の災いはあなたたちには及ばない。**」（出エジプト 12：13）とあります。４世紀の聖ヨハンネス・クリュソストモスはこう説教しています。

●モーセは「一歳の子羊をほふり、その血を戸口に塗りつけなさい」（出エジプト 12:5～7）と言っています。モーセよ、あなたは何を言おうとしているのですか。子羊の血が、理性的な生き物である人間を救うことができると言うのですか。彼は言うでしょう。「しかり。しかし、血そのもののゆえにではなく、**主の血の前表であることのゆえに救いうるのです。**」**今や、戸口に前表の血が塗られているのではなく、キリストが住まわれる神殿の戸口である信者の口に真理である方の血がついているのを見て、当然、悪魔は退くのではないでしょうか。**

この過越祭は、ヘブライ語で「ペサハ」、ギリシヤ語で「パスハ」と言って、キリストの十字架のひな型となりました。この過越祭の時に、イエス様は十字架にかかり、神の小羊として体が裂かれ、血を流されたのです。これによってユダヤ人だけではない、全世界の人のための新しい過越祭が始まったのです。それが復活祭です。

ヘブライ人への手紙に「**すべてのものが、…血で清められており、血を流すことなしには罪の赦しはありえないのです。**」（ヘブライ9：22）とあります。旧約の時は、動物の血を祭具にも、会衆にも振りかけて清めました。新約においてはキリストの血が振りかけられて人は清められるのです。**いくらまじめでも、正しくても、良い行いをしても、信仰が深くても天国には入れず、清められません。キリストの血以外に人を清めるものはないのです。**だから教会は聖餐式を毎週行うのです。聖餐式でぶどう酒の形でキリストの血が皆さんに振りかけられ、皆さんの口に塗られるとき、死は皆さんを通過します。今の教会は、聖餐はあってもなくても良く、人間の信仰が一番だと思っています。大変な思い違いをしています。**キリストの血を飲まなければ命はなく、清められず、神の前に立つことでさえ出来ないのです。それほど人の罪は深いのです。聖餐なしに、キリストの血なしに礼拝は成り立ちません。昔の人たちは命がけで聖餐を食べました。**どうか聖餐のキリストの血の絶大な効力を信じてください。